

On the Road 祝!連載100回突破記念 宇田有三氏の世界

編集部の思い出 On the Road 10 選

数ある思い出の中から苦渋の思いで厳選しました (編集部より)。

世界各地を舞台とする、フリー・フォトジャーナリスト宇田有三氏。そんな宇田氏の連載は、編集部にとって全てのシリーズが思い出となって残っている。その中から厳選された、10の思い出を紹介する。

□連載初回

ルポの連載に快く応じてくれた宇田氏。本誌編集長がパースで氏に最初に会ってから1年半後のことだった。当時、氏と編集部両者ともに、ここまで連載が続くとは思わなかったのでは…。

□連載シリーズ6

当初、氏の名前表記は Uzo Uda だった。しかしこの号から Yuzo Uda に変更。氏からは「名前の表記はどちらでも結構です。変更可能なら Yuzo Uda にして下さい」と。

□連載シリーズ11と12

2回に渡って書かれた『私的フォトジャーナリズム論』で氏は、「写真は、言葉や時間、歴史、地域、性、人種を越える。それは、カメラを持ち、現場に出て初めて答えが出てくるのだ」、「事実を伝えたいという使命が私の背中を押す。事実を記録したいという思いだけで現場に向かう」と。このような思いが氏の原点にはあるのかもしれない。

□連載シリーズ18

シリーズ15の英文訳。日本人読者はもとより、オーストラリア人読者からも多くの反響を頂く。

□連載シリーズ27～30

ルポには書かれていない宇田氏の生の声。「今回の取材は、元強制従軍慰安婦のおばあさんたちの家に1週間住み込み、彼女たちがこの10年間休むことなく続けてきた日本大使館前での抗議デモの500回目を見届けるといものでした。この1週間は、肉体的なものよりも精神的に疲れを感じました。私は日本国籍で、しかも30代後半の男です。178cmの私の前では、ほとんどのおばあさんは私の胸ほどの背丈しかありませんでした。小さなおばあさんたちでしたが、その存在は大きかったです」。

□連載シリーズ33

当時、タイ・ビルマ国境にいた氏との連絡のやり取りはメール

だった。氏から送られてくるメールや原稿は暗号化されたPDFファイル。そのファイルには「ビルマ国内のインターネット状況は悪く(情報統制をしている軍事政権だから当然ですが)、自由にメールを使えるにはほど遠いです」、「とりあえず数ヶ月は、私がビルマに滞在していることはオープンにしないでください。<中略>頻繁な海外とのメールのやり取りは怪しまれるので、できるだけ差し控えております」といった緊迫状況下でコミュニケーションは行われた。

□連載シリーズ40～43

2003年5月から取材先の氏と連絡が取れなくなっていた。そして、7月7日、暗号メールが届く。「サーバー管理者は(ビルマ人といえども)すべてのメールを読むことができます。くれぐれも“超極端/危険”メールの送信はお控えください」「アウンサン・スーチー氏拘束以来、ほとんどの添付メールははねら

れてしまったようです」との報告を受けた。

□連載シリーズ61～62、83～85

「デジカメ考 その1～4」と題し、フィルムカメラとデジタルカメラについて一考を投じた。

□連載シリーズ81

フォトジャーナリストの仕事始めて約15年が経つ氏が、思想と現実を写真に写し込めるのか否かを問う。この号が出版された11月の入稿翌日に長期取材でビルマ入りしている。

□連載シリーズ92

2006年11月15日にビルマ入りし、2007年5月と9月の一時帰国を挟み、10月末日帰国をもって2度目の1年間に及ぶビルマ長期取材が終わろうとしていた矢先に、ビルマで邦人ジャーナリストが銃撃に斃れたというニュースが舞い込む。氏の安否を気遣い、メールを送る。そのやり取りを納めた。